

# 奄美大島名瀬方言の音韻的特質

三十回生 中澤典子

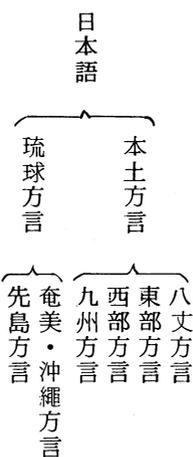
## 目次

序	.....	37
本論	.....	37
第一章 琉球方言について	.....	37
第二章 奄美名瀬方言について	.....	39
第三章 名瀬市の方言の音韻	.....	40
結び	.....	44

序 日本は四方を海に囲まれた島国である。その中でも南西諸島は本土から海によりかなり隔てられ、南西諸島自体もいくつもの島々で形成されている。気候風土はもちろん、言語も方言だけで会話をすれば本土の人々とは全く通じない。言語には、その背景にある多くの事柄が関連してその様相を成立させている。これらの事柄を踏まえた上で実際の言語はどういう姿を見せているのかを、ここでは奄美方言の中心となる名瀬市での調査を通してその音韻の面から見て行く。

## (一) 第一章 琉球方言について

日本語と琉球方言 平山輝男氏によると、日本の方言は左図の様に分類される。



この表からもわかる様に、琉球方言は本土方言と同じ祖語を持つひとつの方言である。にもかかわらず、現在では両者の間には全く通じない程の隔りがある。

果してこれ程大きな差異はどのようにして生じたものであるか、琉球方言の歴史や地理的環境を述べることによって、ある程度納得できるであろう。

「琉球方言と本土方言が日本語から分かれたのはいつか」という問題は、随分論じられて来たが、未だに明確

な年代は打ち出されていない。古い時代の文献資料が少ないことが、古代の琉球の言語の構造や体系の把握を困難にしている大きな理由であろう。そもそも琉球に初めて文字が伝わったのが一二六五年、禅鑑という仏僧によってであったため、これを活用し文字による文化を推し進めるまでには、約二百年程の時間を要したらしい。何故なら、琉球で文献あるいな文字が見られるのは一五世紀末から一六世紀初め頃の墓銘、金石碑文、辞令文書、おもろさうしなどであるからである。

このように、琉球には古代の文献資料が少ないのであるが、種々の科学的方法で日本語からの分岐年代を推定する方法はいくつかとられて来た。

服部四郎氏は、言語年代学的測定計算によって、京都方言と、琉球方言の中心となる首里方言の分岐年代は今から約一四五〇年乃至一七〇〇余年前という数値を示し、後の論文では、「言語年代学的方法によって算出される数字は、分岐年代の可能性の最下限を示すものと考えべきだ」として「奈良朝中央方言のいわば直系の子孫である京都方言と、それと「姉妹関係」にある琉球方言との分岐年代は、今から一五〇〇年前乃至二〇〇〇年前と推定される」と述べている。

また言語学的研究からすると、上村幸雄氏は音韻の面で①八行子音hに対してpを保存しており、この子音が八世紀の奈良ではすでに両唇摩擦音であったと考えられていること。②奄美大島本島那覇方言で「判時味反名

遣いの区別が一部保存されていること。③宮古・八重山那島の諸方言で語頭w行の子音wに対してbが現われ、これがwよりも古い音であろうと考えられていること。④与那国島方言で語頭ヤ行の子音jに対してdが現われ、これもjよりも古い音であろうと考えられていることなどをあげて、これらがいずれも八世紀の奈良の日本語よりも古い日本語の特徴であると思われることから琉球方言と本土方言の分岐を八世紀以前であると、また上村氏は日本語と琉球方言の類似の程度からみて、分離期を本土に弥生文化がひろまるはるか以前だと考えることもできないとしている。

考古学的研究の方面からは、須玖系の弥生式土器が伊江島、沖繩本島北部、その周辺離島から発見されていることから、この期に九州と沖繩の間に交渉があったことは明確な事実であるとし、さらに土器の出土と文化の流入の時期を同一時期と考え、弥生中期には既に大和の言葉（日本語）が南下したとする説と、炭化米・炭化麦が須恵質土器の広布する期に発見されていることから、そうではなくて須玖系土器よりもっと後に現われる須恵質土器とともに文化や大和の言葉が流入したのであるとする説が打ち出されている。

以上の様に言語年代学的測定計算、言語学的研究、考古学的研究などの各方面から日本語が本土方言と琉球方言に分岐した時期（というよりむしろ、琉球に大和の言

つ①ノイニ音上は文してエを併有してたり。この子音が八世紀の奈良ではすでに両唇摩擦音であったと考えられていること。②奄美大島本島南部諸方言でオ列特殊反名

れているわけだが、いずれも仮説であって前述のとおり確定的な年代はわかっていない。現段階では、科学的諸研究を総合して、八世紀以前でしかも紀元前にさかのぼるとは考えられないというのが一般的な論である。

琉球に入りこんだ大和の言葉はその時点から本土とは異なった変化を遂げていった。そこには、地理的事情が大きく影響したのである。

現在琉球方言の用いられている北端の奄美大島本島でさえ鹿児島から約三百キロ離れており、南端の与那国島は鹿児島から約千キロ、台湾とは百キロに満たない距離である。このように本土から隔り、また大小様々の島から成っている琉球が本土の言語の変化発展に動かされることなく独自の变化を遂げたことはもっともなことである。この間本土との交流はどうであったかといえ、公式の使者としては、先に述べた禅鑑が初めてであり、それ以前には少なくとも琉球の社会的あるいは政治的構造を左右するような交流は行なわれなかったようである。従って、この間琉球では、その閉鎖的な地理的状况からしても歴史の流れは極めてゆるやかであった。そして社会的事実である言語は本土における歴史の発展や社会構造に添った言語変化の影響を受けることなく独自に発展していったのである。

## 第二章 奄美名瀬方言について

### (三) 音韻的特徴

#### (1) 特殊母音 $y \cdot \epsilon$ について

古学的研究などの各方面から日本語が本土方言と琉球方言に分岐した時期（というよりむしろ、琉球に大和の言葉が入り、それが話されるようになった時期）が定明さ

伊波普猷氏によって明らかにされた共通語  $i$  の中舌母音  $y$ 、及び佐久間鼎氏が示した共通語  $e$  の中舌母音  $\epsilon$  が名瀬では五母音に加えて用いられているのは、名瀬の母音に関する最も重要なことであろう。この二つの母音について詳しく述べると、寺師忠夫氏によれば、 $y$ 、 $\epsilon$  は  $i$ 、 $e$  の場合よりは舌の中程の位置が高まっているのは勿論であるが、単にそれだけではなく、 $i$   $e$  の場合よりは舌端の緊張がゆるんで下向きになって後退し、後舌部がむしろ、緊張して軟口蓋に接近するので、調音域は後退しているということになる。（「奄美方言の研究」より）実際に聞いた感じは、はっきりと発せられるのではなく、内にこもった様で軟かい音である。土地の人たちは、会話の中などで難なくこの二つの中舌母音を使っており、その使用頻度も比較的高い。調査時にも、被調査者がそれをはっきりと意識しており、例えば「目」のことを「メではなくて（中舌母音の）メである」と言ったぐらいである。そして、「奄美のことばは、文字では書けない」という言葉も何度も聞かれた。土地の人たちは、二つの中舌母音を奄美独特の発音様式と自覚し、またこれに誇りも持っているようである。

この二つの中舌母音がどのようにして発生したものは、明らかにされていない。ただ、五母音中の  $e$  と  $i$  の接近に伴って両音のかすかな区別意識が働いて、このような中舌母音が発生したのであろう、とは言わ

れている。

(2) 子音について

共通語で用いられる子音がやはり名瀬でも用いられているが、特異な現象として、有気音と無気音との区別が音韻的に存在している。この対立は、非喉頭化のために有気音となり、喉頭化のために無気音となるという様にして生じるものである。喉頭化は喉頭の緊張を伴い、非喉頭化はその緊張を伴わないことである。名瀬では非喉頭化子音  $h$ 、 $h'$ 、 $h''$ 、 $h'''$  のそれぞれに対立する喉頭化子音として  $h_1$ 、 $h_2$ 、 $h_3$  が用いられていると言われている。喉頭化子音の  $h$  を例にとるならば、寺師忠夫氏によれば、共通語で「一向に」「一貫目」と言う時の「向」「貫」に力を入れる場合の語頭の  $k$  がそれであると言う。(「奄美方言の研究」より) また、これら喉頭化子音は名瀬では語の頭位だけに立つ。

喉頭化子音を生み出した要因としては、母音の様相と関係があり、イ段とエ段、ウ段とオ段の母音の接近あるいは統合により、それぞれの間にある均衡を失うまいとして、子音の方で変化を遂げたということが考えられている。即ち、喉頭化子音は副次的音韻である。

第三章 名瀬市の方言の音韻

調査の概況

名瀬市の方言で用いられる音韻のさらに詳しい様相を知るため、現地調査を行なった。

市街地、あるいはそれに近い地点で、二八才から九四才

まで一六人について九四語を調査した。なお、調査期間は、昭和五六年十一月一〇日から一七日までの八日間である。

(一) 母音、子音の様相

(子音+母音) という形をとる場合、母音、子音がどのような様相を示すかを各行別に分類し、被調査者の年齢を縦軸にとり簡単な表にした。表中では、簡略化のため、音声の表記は全て「 $\sim$ 」を省いた。

(1) 各行別

各行別に名瀬の方言に用いられる母音、子音を見てきたが、その接近あるいは統合の面からその特徴を次にまとめる。

(ア) まず、母音の接近、統合の型として、二種に分けられる。

① ウ段がイ段、エ段に接近、統合しているもの。

サ行、タ行

② イ段とエ段、ウ段とオ段の間でそれぞれ接近、統合しているもの。

カ行、ナ行、ハ行、マ行、ラ行、ヤ行

(イ) カ行とタ行は子音の喉頭化、非喉頭化により、各段の区別を保っている。

(ウ) 子音に全く変化の現われないのは、ナ行、マ行、ラ行、ヤ行である。

(エ) (ウ)の②の場合、イ段とエ段ではエ段が「 $y$ 」にとどまることにより、区別を保っているが、これに比

各瀬市の方言で用いられている音韻のことに詳しくは材料を知るため、現地調査を行った。  
市街地、あるいはそれに近い地点で、二八才から九四才

(イ) カ行音

(※ 'kは喉頭化、無気音であることを示す)

	カ	キ	ク	ケ	コ
28	ka	ki	kw	ke	ko
31	ka	ki	kw	ke	ko
34	ka	ki	k'w	k'i	kw
43	ka	k'i	k'w	k'i	kw
43	ka	ki	kw	k'i	ko
50	ka	k'i	kw	k'i	ko
56	ka	k'i	kw	ke	ko
57	ka	k'i	kw	ke	ko
63	ka	k'i	kw	k'i	kw
66	ka	k'i	kw	k'i	kw
69	ka	k'i	k'w	k'i	ko
73	ka	k'i	kw	k'i	ko
77	ka	k'i	kw	k'i	ko
83	ka	k'i	k'w	k'i	ko
86	ka	ki	kw	k'i	ko
94	ka	k'i	k'w	k'i	kw

(ロ) サ行音

	サ	シ	ス	セ	ソ
28	sa	fi	sw	se	so
31	sa	fi	sw	se	so
34	sa	fi	fi	fi	sw
43	sa	fi	si	si	sw
43	sa	fi	sw	se	so
50	sa	fi	fi	fe	sw
56	sa	fi	sw	fe	so
57	sa	fi	sw	se	so
63	sa	fi	sw	s'i	sw
66	sa	fi	s'i	s'i	so
69	sa	fi	sw	se	sw
73	sa	fi		se	so
77	sa	fi	fi	se	sw
83	sa	fi	s'i	s'i	so
86	sa	fi	sw	fe	so
94	sa	fi	fi	fe	sw

(ハ) タ行音

	タ	チ	ツ	テ	ト
28	ta	tfi	tsw	te	to
31	ta	tfi	tsw	te	to
34	ta	tfi	ti	t'i	tw
43	ta	tfi	tsw	t'i	tw
43	ta	tfi	tsw	te	tw
50	ta	tfi	tfi	t'i	tw
56	ta	tfi	tsw	te	to
57	ta	tfi	tsw	te	to
63	ta	tfi	tsw	t'i	tw
66	ta	tfi	tw	t'i	tw
69	ta	tfi	tfi	t'i	tw
73	ta	tfi	tsw	t'i	tw
77	ta	tfi	tfi	te	tw
83	ta	tfi	tfw	t'i	tw
86	ta	tfi	tsw	te	tw
94	ta	tfi	tfi	t'i	tw

(ニ) ナ行音

	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
28	na	ni	nw	ne	no
31	na	ni	nw	ne	no
34	na	ni	n'i	n'i	nw
43	na	ni	nw	ni	nw
43	na	ni	nw	ne	no
50	na	ni	nw	ne	no
56	na	ni	nw	ne	no
57	na	ni	nw	ne	no
63	na	ni	nw	n'i	no
66	na	n'i	nw	ne	no
69	na	ni	nw	n'i	nw
73	na	ni	nw	n'i	no
77	na	ni	nw	ni	no
83	na	ni	nw	ni	nw
86	na	ni	nw	n'i	no
94	na	ni	nw	n'i	no

(エ) (イ)の②の場合、イ段とエ段ではエ段が(ハ)にとどまることにより、区別を保っているが、これに比

	マ	ミ	ム	メ	モ
28	ma	mi	mw	me	mo
31	ma	mi	mw	me	mo
34	ma	mi	mw	mi	mo
43	ma	mi	mw	mi	mo
43	ma	mi	mw	mi	mo
50	ma	mi	mw	mi	mo
56	ma	mi	mw	me	mo
57	ma	mi	mw	me	mw
63	ma	mi	mw	mi	mo
66	ma	mi	mw	mi	mo
69	ma	mi	mw	mi	mw
73	ma	mi	mw	mi	mo
77	ma	mi	mw	mi	mo
83	ma	mi	mw	mi	mo
86	ma	mi	mw	mi	mo
94	ma	mi	mw	mi	mo

マ行音

	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
28	ha	xi	Fw	he	ho
31	ha	xi	Fw	he	ho
34	ha	xi	Fw	xi	Fw
43	ha	xi	Fw	he	Fw
43	ha	xi	Fw	he	Fw
50	ha	xi	Fw	he	ho
56	ha	xi	Fw	he	ho
57	ha	xi	Fw	he	ho
63	ha	xi	Fw	he	ho
66	ha	xi	Fw	Fi	Fw
69	ha	xi	Fw	he	Fw
73	ha	xi	Fw	he	Fw
77	ha	xi	Fw	he	Fw
83	ha	xi	Fw	he	Fw
86	ha	xi	Fw	he	ho
94	ha	xi	Fw	Fi	Fw

ハ行音

	ラ	リ	ル	レ	ロ
28	ra	ri	rw	re	ro
31	ra	ri	rw	re	ro
34	rja	ri	rw	rw	rjw
43	ra	ri	rw	ri	rw
43	ra	ri	rw	ri	rw
50	ra	ri	ri	re	rw
56	ra	ri	rw	ri	rw
57	ra	ri	rw	re	rw
63	ra	ri	rw	re	rw
66	ra	ri	rw	re	rw
69	ra	ri	rw	ri	rw
73	ra	ri	ri	ri	ro
77	ra	ri	rw	ri	rw
83	ra	ri	rw	ri	rw
86	ra	ri	rw	re	rw
94	ra	ri	rw	ri	rw

ラ行音

	ヤ	ユ	ヨ
28	ja	jw	jo
31	ja	jw	jo
34	ja	jw	jw
43	ja	jw	jw
43	ja	jw	jo
50	ja	jw	jo
56	ja	jw	jo
57	ja	jw	jo
63	ja	jw	jw
66	ja	jw	jw
69	ja	jw	jw
73	ja	jw	jw
77	ja	jw	jw
83	ja	jw	jw
86	ja	jw	jo
94	ja	jw	jw

ヤ行音

これらの( )は大きく二つに分けられる。即ち、

28
31
34
43
43
50
56
57
63
66
69
73
77
83
86
94

(9) ワ行音

	ワ	キ	ユ
28	wa		
31	wa		
34	wa	i	w
43	wa		w
43	wa		o
50	wa	i	w
56	wa	i	w
57	wa		w
63	wa	i	w
66	wa	i	w
69	wa	i	w
73	wa	i	w
77	wa	i	w
83	wa	i	w
86	wa	i	o
94	wa	i	w

へてウ段とオ段は統合しやすい。

(9) で、ウ段がイ段、エ段に接近、統合する度合より、イ段とエ段、ウ段とオ段それぞれが接近、統合する度合の方が高い。

(2) 中舌母音〔e〕について

中舌母音〔e〕は共通語の単一の母音でこれに対応しているものは殆ど見あたらない。この調査で中舌母音〔e〕が聞かれた語は、次のとおりである。

- 台風〔tɛ:f-w〕 大工〔sɛkw; sɛkwmin; dɛkw; dɛkw〕  
 分ける〔wɛ:ri; wɛ:rjwn〕 速い〔Fɛ:sa〕 影〔kage〕  
 竹〔dɛ:] 酒〔sɛ:] 前〔mɛ:] 灰〔Fɛ〕  
 換える〔kɛrw; kɛrjwn; kɛ:ri; kɛ:rjwn〕  
 牡丹〔mɛwji〕 這う〔Fɛ:wn〕 肥〔kwɛ〕 畑〔hate:]  
 苗〔nɛ〕

28
31
34
43
43
50
56
57
63
66
69
73
77
83
86
94

これらの〔e〕は大きく二つに分けられる。即ち、

(1) 共通語の連母音に置き換えられるものと、(2) 母音+子音+母音に置き換えられるものである。(1)では、連母音〔ai〕が「台風・大工・灰」、〔ae〕が「前・換える・苗」、〔av〕が「牡牛」、〔av〕が「這う」、〔oe〕が「肥」となっている。(2)では、〔a〕+子音+〔e〕が「分ける・畑・竹・酒」、〔a〕+子音+〔a〕が「速い」である。例外として「影」は〔e〕と〔e〕が対応しているが、このような例は他には見られない。また、この場合〔kɛw〕と発音する人もいた。連母音と対応する場合、中舌母音の〔e〕は単母音にも長母音にもなり得るが、そうでない場合は長母音となっている。中舌母音の〔e〕は〔ɪ〕に比べて聞かれることが少なく、その中でもわりと残っているのは、連母音〔ai〕と〔ae〕+子音+〔e〕に対応するものであった。共通語の母音〔ɪ〕、〔w〕の中舌母音〔ɪ〕、〔w〕が聞かれる方言は北海道や奥羽、北陸、雲伯地方にもあるが、〔e〕は今のところ琉球方言を除いては聞かれない。連母音が長母音に発音されるのは、共通語にも「警察」をケーサツと言ったり、「先生」をセンセイと言ったりすることなどに見られるが、これが中舌母音の〔e〕の長母音となっている方言はない。

このように、中舌母音〔e〕については、〔ɪ〕と比べて不明な点が多く、また減少してきているようである。今回の調査からも、使用例が少ないので、これ以上の

詳細なことは述べられない。

## 結 び

調査の前に、文献で名瀬の方言の音韻については、その概略を把握したつもりであったのだが、実際現地に行き調査を行なってみると、文献にそぐわない現象にしばしば遭遇し、言語は動いており、社会生活とともに変化発展を遂げるものであることを痛感した。

中舌母音、有気音と無気音の区別は、言語生活上、ある程度の必然性を持っていたことに對して、自然の推移ではあろうけれども、そのような人間の言語活動とも言うべきものに改めて感心した。

また、年齢別に見ると、年齢による規則性がないことがわかった。二八才、三一才では全く方言が聞かれなかった。名瀬では、方言の使い方には個人的な違いがあり、名瀬独特の方言というものは、現在は殆ど残っておらず、名瀬が奄美大島本島北部の各町村の人々が集住しているという性質を持っているため、それらの地方の方言が混じり合つて名瀬の方言を形成しているといえよう。

全国的に言えることであるが、年齢の若くなるにつれて、方言を用いる人は減少し、名瀬を含む奄美方言では、特にその傾向が著しく、聞いた感じのアクセントこそ違つてはいるが、言葉自体は完全な共通語が話されており、従つて音韻も完全に共通語化しようとしているのには驚かされた。

学校では、方言を使用した者は成績全体から減点処分を受けたり、方言を使ったことを示す札を首から下げさせられたりした時期もあった。それが、近年になって、万葉集と琉球古謡の集められた「おもろさうし」との比較研究や日本の古代語と琉球方言の関連についての研究などが盛んに行なわれるにつれて、方言を残そうという意識が徐々に芽生えて来たのである。しかし、古い時代の方言を使える人は極く少なく、しかもかなりの高齢者であるために、伝承もそうたやすいことではなからう。

奄美も含む琉球には、舞踊や古歌、祭事など様々の古き良きものが残っている。島の人々の、土地に對する愛着も非常に強い。このような恵まれた風土を持つ琉球に独特の流暢な言葉、ひいてはこれを流暢に聞こえさせる中舌母音が失なわれていくのは、本当に残念なことである。方言を保存して行こうとする少しでも多くの若い世代の人々が存在すれば、それは日本の言語学上からしても、大変貴重なことと言つても決して過言ではないと考える。